Column

「社会調査のあれこれ」

たんに，もっともすればよいのに，と

立岩　真也（立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）

現地に出かけて直接人の話を伺うという類の調査をしたのは，博士課程に入った1985年からの数年だけのことだ。それは『生の技法――家と施設を出て暮らす障害者の社会学』という共著書になって，1990年に初版，95年に増補改訂版，そして2012年に第3版を文庫版で出してもらった。ずいぶん長い期間・時間，話を伺った。じつはそこで得られた話は，そのままの「引用」のかたちではほとんど私が担当した章には使われていない。「聞き取り」で論文を構成するといったスタイルがなかったわけではない。その頃からそれはわりあいよくあるかたちになりつつあった。単に私の担当した章はそのように書く必要がなかったということだ。けれどそうして聞いた話は，その本のすべての「もと」になったし，そしてその後，私が「机上の空論」を延々と続けていくときの「もと」にもなった。まず「調査」とはそういうものではないかと思う。当たり前だけれど，言いたいことの1つがそのこと。

そして，もう1つ思うのは，信じられないほど調査されてよいことが調査されていないということ。社会学者だけでもこんなにたくさんいるのになんで，と思うことがある。私たちの先の本になった調査については理由があった。（当時の，と言っておくが）社会福祉（学）の「主流」にとって快くないものだったからだ。そして今でも，様々な事情・力学のもとに調べられるべきが調べられないことが多々ある。そこをどういう手練手管を使って調べるか。ときには「調査倫理」的にぎりきりの（しかし妥当な）線を狙う必要もある。そこが工夫のしどころなのに不要に無駄に慎重になってしまっていることがあると思う。そしてそんな「きな臭い」ことと関係なく，本当にまったく単純な意味で調査されていない領域が広大に残されている。私は，COEという仕組みがしばらくあったために「〈生存学〉創成拠点――障老病異と共に暮らす世界へ」というものに関わってきたのだが（今は大学内の研究センターになっている），その仕事をやっていて，あきれるほど何も調べられていないところがあまりにたくさんあることを思った。他方では，「ねたさがし」に苦労しているという大学院生がいたり，同じようなことを多くの人がやっていて妙に混み合っていたりするらしい。世の中に何があるか，調べるとおもしろそうか，事実・ヒントを示す側にも問題があるのかもしれない。何十でも今すぐにできる，したらよいことが挙げられるはずなのにと思う（生活書院刊の『生存学』3・4号での天田城介氏との対談「生存学の技法――障害と社会，その彼我の現代史」を参照のこと）。

そしてもう1つ，そうやって気がつかれず，なされないうちに――この頃そのことばかり言って書いているのだが――もういくつのものことが，あるいはその記憶が，なくなっているか，なくなりかけている。私たちのその本も初版から22年だから，当然のことではあるが，幾人もの人が亡くなっている。その多くは長い文章など書き遺さなかった人たちだ。たとえば，若くして突然亡くなった人（1948年に生まれ99年に没した高橋修という人がいた）について，文字として残されているのは，私たちが行った3回の聞き取りを文字にしたもの，他に限られる。その3回の聞き取りができただけで，私はあの時期，論文も書かず――一番書かねばならなかった博士課程3年からの4年，1本も書かなかった――調査をしていてよかったと思う。これからしばらくを逃すと何も残らない。そんなことがたくさんある。

Column

「社会調査のあれこれ」

発音についての意識調査

――「聞き取りアンケート調査」という方法――

田中　ゆかり（日本大学文理学部教授）

「とびはね音調」と名づけられた「タカクナイ？（図 1）」のような発音を耳にされたことはないだろうか。従来の発音の「高く」と「ない」に現れるアクセントの下がり目が，この新しい発音では，無視される。イントネーションはアクセントを打ち消さない，という音声学的原則を，この音調は打ち破っているのである。

このちょっとアナーキーな音調は，1990 年代の首都圏において若い女性から広がり，首都圏では中高年層の使用も確認される。今や首都圏出身者でもないアナウンサーまでもがこの音調を用いており，どうやら首都圏発の新しい音調として全国に広まっているようであるが，まだ確かめた人はいない。発音は基本，対面でないと調べることが難しいが，1 人で全国各地を回ることも困難だ。

そこで，この音調が全国各地でどのように受けとめられているのかをざっくり知るために，「聞き取りアンケート調査」という方法を用いて調べてみた。私が共同研究者として参加している国立国語研究所基幹型共同研究「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明（プロジェクトリーター：相澤正夫）」の一環である。

「聞き取りアンケート調査」とは，回答者に刺激音声を提示し，それに関する使用意識などをアンケート形式で尋ねるものである。方言アクセント調査では，調査者がいくつかの発音を提示しながら，話者の認識を探るという伝統的な手法があり，その多人数向け応用編である。面接調査では話者の様子をみながら発音を調整するなどのきめ細やかな対応ができるが，提示する刺激音声，提示の仕方，話者への尋ね方，いずれも話者の反応に従って変えるので「その場性」が高く，この手法で収集されたデータは均質なものとはいいにくく，量的観点からの検討にはあまり適さない。

それに対して，「聞き取りアンケート調査」は，

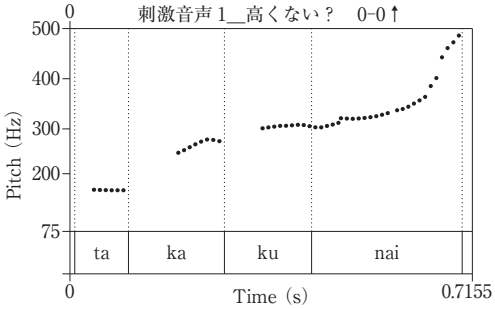

図 1　「高くない？ 0-0↑」とびはね音調の F0 曲線

量的検討を視野に入れた均質なデータ採取を目指して，刺激音声・設問・選択肢を統一する。ただし，提示できる刺激音声は限られるし，回答者が，刺激音声をどのように聞き，設問・選択肢に対して調査者の期待するような反応をしているのかは，アンケート調査の常としてわからない。

具体的には，調査会社に委託し，47 都道府県に 10 年以上の居住経験をもつ生え抜き・準生え抜きレベルの若中高の 3 年層・男女 2 人ずつ計 564 人を対象に，2012 年 10 月に面接調査を実施した。「とびはね音調」に関連する 6 つの刺激音声をレコーダーで聞かせ，それぞれの使用程度・聞く程度・意味などを尋ねた。

詳細は分析中だが，「とびはね音調」は，属性差は大きいが，全国平均で 4 割弱が使うと答え，6 割弱が耳にし，6 割強が「同意求め」表現として認識しているということが確認できた。「聞き取りアンケート調査」が，全国規模の調査方法としても有効なことも確認できたように思う。

一方，臨地調査に基づく実態データと重ね合わせるべき課題なども浮かび上がった。データそのものの吟味に加え，このちょっと変わった調査方法についても検討を重ね，さらに洗練させてみたいものだと考えている。